

残像抄(9)

『芳名録』より — 完 —

大和文華館 館長 石澤正男

残像抄(5)から「『芳名録』より」と題して、大和文華館に来訪され、備付の芳名録にお名前を誌された人々の中から、吾々が特に敬愛の情をもっている方々に御登場願ひ、前号で漸く大和文華館が昭和35年11月1日より一般に公開される時点に近づいたところで、芳名録第一冊を終るにつけて是非一つだけ御紹介しておきたいのは『美のたより』52号の残像抄で柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチの四人の方々の揃って御署名されている写真に、富本憲吉先生が欠けているのを残念に思うと書きました。それが昭和36年11月22日にバーナード・リーチ(Bernard Leach 1887~1979)さんと最も親しかった富本憲吉(1886~1963)さんがお二人で揃って来訪され、しかも写真に見られるような素描を残してゆかれたことでもあります。

一般公開に先立って、10月31日に開館式が新しい講堂で挙行されました。当日は高松宮・同妃両殿下の御臨行を仰ぎ、妃殿下のテーブル・カットで式が始られ、来賓御一同が講堂に入場され、最初に佐伯勇理事長が開会の挨拶、次いで高松宮殿下より御鄭重な御祝辞を賜りました。その後元文部大臣・元帝室博物館総長・学習院院長の安倍能成先生が国内の美術館を代表しての御祝辞があり、それに続いて遙々その日の為に来日されたロンドンの大英博物館東洋部長バージル・グレー卿が海外の美術館を代表して祝辞を述べられ、最後に矢代幸雄初代館長が開館に

至る経過報告を述べられて式を終りました。

一方開館式に先立ち、かねがねこの日に間に合うよう故芸術院会員の彫刻家朝倉文雄氏に委嘱して制作を完成されていた元近鉄社長で大和文華館の生みの親というべき故種田虎雄氏の胸像の除幕式が令嗣種田憲次氏御夫妻・佐伯理事長らの立会の下に令孫博君の手で行われました。

開館式後は内外の賓客が陳列室に展示された蒐集品中の名品を觀賞しながら歓談され、陳列館のピロティに設けられたレセプション会場で歓談が続けられました。この開館式には在日外交団の人々以外に欧米の美術館及び美術愛好家が招待に応じて多数参加されて、総数 200名稀に見る国際色豊かな開館式として今に伝えられています。当日の写真はよくその状況を伝えているのですが、当日は芳名録の用意もなく、また詳細な記録もないのは些か残念というより仕方ありません。せめて当日の写真は、これからでもおそくありませんからアルバムに編纂して後世に伝えて置きたいものと考えております。

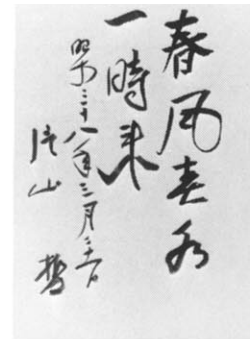
一般公開された1960年11月からその年内には一人の署名者もないのはちょっと腑に落ちない気がありますが、年が変わると俄然芳名録も賑やかになります。芳名録は第二冊目から形式も一定し、現在第七冊目が3分の2ほど大勢の人々の御署名や感想で埋まっているのが現状です。従って、今までのようなやりかたでは到底収拾がつかえません。

残念ではありますが、この欄に割り当てられた原稿の制限の許す範囲でお名前を挙げ、大部分は割愛せざるをえなくなったことを御諒承願いたいと存じます。

最初に、大和文華館に御来臨下さいました皇族の方々を年次の順に申し上げますと、第一には前述の通り高松宮・同妃両殿下が35年10月31日の開館式に御臨行されております。翌36年10月5日には秩父宮妃殿下、同月9日には高松宮妃殿下の御臨行があり、両妃殿下とも親しく御署名あそばされております。次いで37年1月18日には古代オリエント史学に御造詣の深い三笠宮崇仁殿下が前の天理教真柱中山正善氏、東洋考古学に偉大な業績を残された京都大学名誉教授梅原末治氏、古代オリエント学・エジプト考古学専門の東京教育大学名誉教授杉勇氏と御一緒に御臨行され、御署名されてゆかれました。

慣例として御署名はなさいませんが、皇族方のハイライトとなったのは昭和45年3月15日、万国博覧会の開会式に行啓あそばされた皇太子・同妃両殿下が翌16日当館へ行啓されましたことは、当館の歴史を飾るこの上ない光栄でありました。

芳名録の第二巻の巻頭の署名は37年1月13日付で駐日米国外使エドウィン・O・ライシャワー御夫妻であります。大使は「29年前の矢代先生の懐しい数々の講義を思い出しながら」との一文を添えておられます。それは矢代前館長がアメリカ東部の名門大学の筆頭と

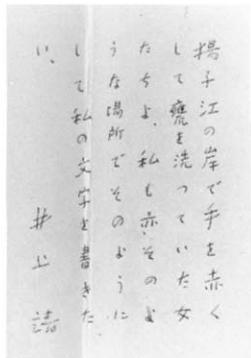


片山哲氏の署名('63-3-21)

いわれるハーヴァード大学に招聘され1932年9月に始まる一学年間同大学で日本美術史の講義を担当された時、ライシャワー大使は先生の講義を聴講した学生の一人であったことを物語っているのがあります。

37年5月15日のところにはジェームス・E・オブライエン夫人が令嬢と御一緒に署名されております。この方は開館式にもわざわざ来日されて出席された方ですが、その後も合せて5度も来訪されました。夫人は根付の研究家・蒐集家で、昭和40年には英文で『根付・蒐集家への手引書』をタトル出版社から刊行されていますが、その後46年には夫人の愛蔵されている根付蒐集から特に17点を選びアジア財団を通じて大和文華館に寄贈して下さいました。このことは『美のたより』18号で「海外からの心温まる贈物」と題して、私が読者の皆様方に簡単ながら御報告いたしておきました。

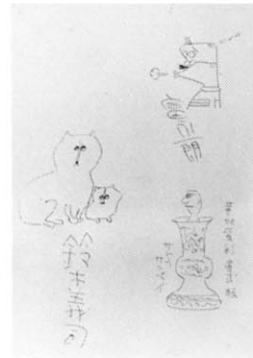
芳名録を次ぎ次ぎに見てゆきますと、流石に多いのは欧米の著名な美術史学者、特に東洋美術史学者、美術館職員、大学教授等で、それらを拾いあげてゆくと立派な人名録ができあがると思う位です。これも他日だけれど、国別、専門別にして日時順に整理したら、面



井上靖氏の署名('67-3-12)



リーチ氏、富本憲吉氏の署名('61-11-22)



漫画集団一行の署名のうち('64-11-11)

白いものができそうな気がします。ただ個性の強く表わされた署名だけのものが、案外沢山あって、判読し兼ねるのが悩みの種になりそうです。

国内の来訪者をざっと分類してみますと、やはり海外からの来訪者と同様に美術・文学の領域に関する学者や作家が大多数を占めているのは極く自然の傾向を物語っているといつてよろしいでしょう。然し政治家や実業家も決して少くはありません。少し例を挙げますと38年3月21日に社会党委員長で短期間(22年5月~23年3月)ながら初めて総理大臣として内閣を組織された故片山哲氏が来訪され暢達な筆蹟で「春風春水一時来」(写真参照)と書き残されています。

それより少し後れて38年6月21日に二度も総理大臣を務めた自民党の岸信介氏が来訪され、いかにも書き馴れた達筆で「温故知新」の四字を書き残されています。この時は大阪商工会議所会頭の杉道助氏と大丸百貨店の会長北澤敬二郎氏が同行されました。

38年10月7日には奈良女子大学教授で、優れた異色ある数学者として文化勲章を受章され、奈良市の名誉市民にもおされていた岡潔先生が開催中の春の名品展を御覧

になった後、芳名録に先生お得意の認識論を書き残してゆかれました。

自然が在と思ふのは自然が分かるからである この分かるから心の働きが先であつて然る後に自然があるのである 自然が始めにあるとするのは假定に過ぎない 岡潔識

昭和42年3月12日、春の名品展開催中、講演のため来館された作家の井上靖氏は、「最近考えていること」と題する講演の後、芳名録に御署名をお願いしたら、

揚子江の岸で手を赤くして甕を洗っていた女たちよ。私も亦そのような場所でそのようにして私の文字を書きたい。

井上 靖

と即座に、然しゆっくりとペンを運ばせて、一文を残されました(写真参照)。このお二人の書かれた文章が芳名録に見られる一番長文のものであり、しかもそれぞれのお人柄をよく表わしていると考えられます。

最後に昭和39年11月11日に来訪された漫画集団御一行18名が芳名録5頁に残された漫画つき御芳名の一部(写真参照)を御紹介してペンを擱くことにします。(81・4・23)終